

がん診療 あさひ

10号
2022年2月
発行

～がんと診断されたり、治療を受けるときに、役立つ情報をまとめました～



臨床病理科スタッフ

臨床病理科(病理診断科)は、がんの病理診断(組織診断、細胞診断)を担当し、がんの診断治療には不可欠な診療科です。病理診断は体の中から取り出された組織(胃、大腸、乳腺など)を顕微鏡で観察し、その異常な所見から病気の診断をします。日本では病理診断を専門にする医師(病理専門医)の数が絶対的に不足しており、全国的には満足な病理診断がなされているとは言いがたい状況です。しかし、当院には専門医が4名、その途上にある医師が2名在籍しているほか、様々な施設よりエキスパート病理医を嘱託医として招いており、その診療レベルは日本有数です。

昨今のがんの病理診断には腫瘍の診断をするだけでなく、分子生物学的特徴や遺伝子レベルでの異常を調べることが求められています。免疫チェックポイント阻害剤の研究がノーベル賞となったように、日々がんに対する新薬が開発されています。こうした薬剤の使用の適否を決めるために新たな手法を取り入れた病理診断も必要になっています。当科ではがん治療の進歩に即座に対応しており、地域がん診療連携拠点病院にふさわしい病理診断を行っています。

当院は、「地域がん診療連携拠点病院(高度型)」に指定されています。

地方独立行政法人
総合病院 国保旭中央病院

〒289-2511 千葉県旭市イの1326 TEL.0479-63-8111(代) FAX.0479-63-8580

www.hospital.asahi.chiba.jp

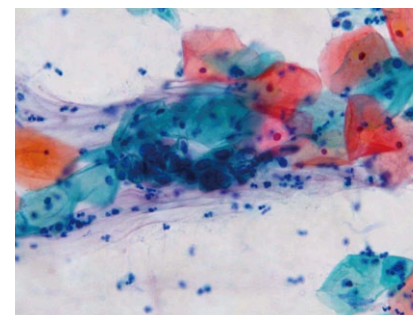
新しい手技として 液状化細胞診

がんは簡単に言えば、遺伝子に異常をきたした細胞が、意味もなく増え続ける病気です。採取された細胞を適切に保存し、網羅的にがん細胞の遺伝子を検索する事で、異常の意義を解明できたり、有効な治療方法開発につながる事が期待されています。

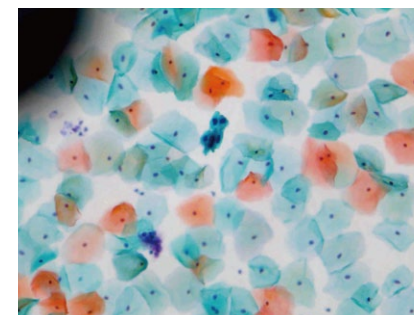
患者さんの様々な負担を考えれば、がん細胞の採取は一度ですむことが望まれます。通常の病理診断が正しくなされたうえで、遺伝子を良い状態に保つことが必要です。組織は特殊な手技を施すことにより、比較的長期に保存できますが、細胞診は現在は困難です。それを改善する一つの手段として、液状化細胞診(LBC)が開発され、当院でも導入が完了しました。この方法の利点として、液状化した検体を使用して、がんの病理診断確定後に遺伝子の検索が可能です。また、がん化の危険性が高い、ある種のウイルス感染についても、診断の後に検索が可能になりました。また、診断者にとっても、観察しやすい標本を作製することができます。



LBC装置



通常法の細胞診:細胞の重なり合いが目立つ。



LBCによる細胞診:平面的で、観察しやすい。

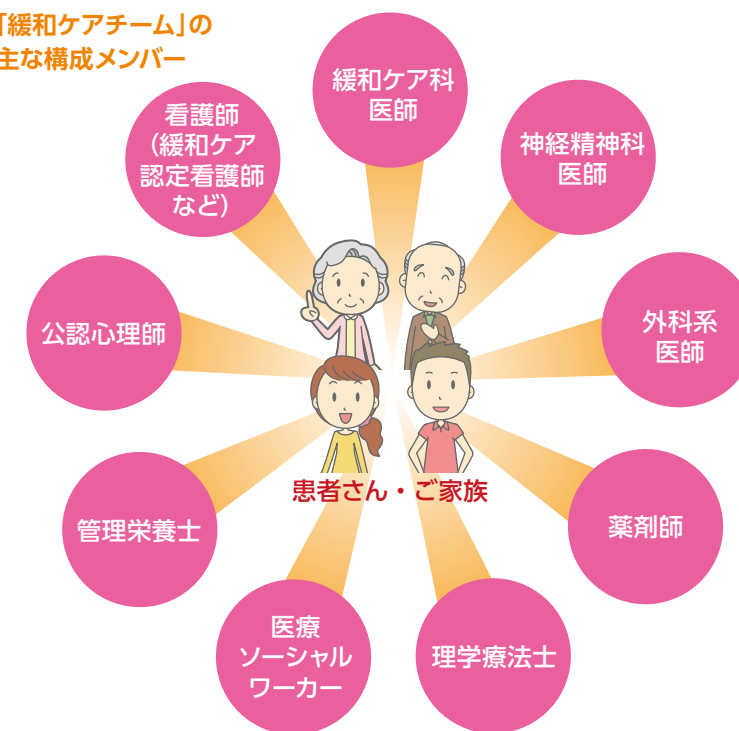
臨床病理科 鈴木 良夫

緩和ケアチーム について

- 今の日本では、がん診療に携わっている医療従事者であれば、「鎮痛薬の開始(医療用麻薬を含む)」や「相談部門への紹介」など、ある程度の「基本的な緩和ケア」は行うことができます。しかし、実際に多くの患者さんが苦痛を感じている、「鎮痛薬の調整に難渋する痛み」「複雑な問題が背景にある不安」「自分の存在が危うくなったと感じる時のつらさ」などに対しては、「急を要する対応」や「複雑な対応」が必要となります。そのため、最近では、がん診療を行っている病院を中心として、全国の多くの病院に、多くの専門職種からなる「緩和ケアチーム」が設置され、いつでも「専門的な緩和ケア」が受けられるようになっています。
- 当院の「緩和ケアチーム」には、緩和ケア科医師、神経精神科医師、外科系医師、薬剤師、理学療法士、医療ソーシャルワーカー、管理栄養士、公認心理師、看護師(緩和ケア認定看護師など)が参加しており、「患者さんのために今できること」を一緒に考えています。
- 体や心のことで何かお困りでしたら、主治医や担当看護師を通じて「緩和ケアチーム」にご相談ください。

※なお、本来、緩和ケアの対象は「がん」などの悪性疾患に限らないのですが、当院では現在、対象を「がん患者さん(当院に通院中、あるいは入院中)のみ」とさせていただいておりますので、ご相談される際にはご注意ください。

「緩和ケアチーム」の 主な構成メンバー



がん相談支援センター

「がん」について、お気軽にご相談ください

「がん診療連携拠点病院」には「がん相談支援センター」が設置されています。

当院では、社会福祉士・看護師が相談に応じます。必要に応じて、医師・薬剤師・管理栄養士等と連携して、お話を伺います。

〈相談例〉

- がんと言われて頭が真っ白になってしまい、誰かに話を聞いてほしい。
- どのように治療に取り組んだらよいでしょうか?
- がんの治療ってどのくらいお金がかかりますか?
- 仕事を続けるのは無理でしょうか?
- 介護が必要になったらどうしますか?
- 緩和ケアについて知りたい。



など

セカンドオピニオンについては、「紹介患者センター」で相談に応じることができ
ます。(医療機関検索・相談方法・費用・予約について)

がん相談支援センター 2号館1階 医療連携福祉相談室
時間/月～金(祝日・年末年始を除く)8:30～17:15

相談は無料です。

※なるべく予約していただくことをお勧めしています。

※当センターで医師と直接お話をすることはできません。社会福祉士・看護師
がお話を伺い、担当医にご相談内容をお繋ぎすることは可能です。

ハローワーク出張相談

ハローワークスタッフが当院で個別に就職のサポートをします。治療のために仕事を辞め、就職を希望されている方や、仕事の継続を希望の方、治療のため就職準備が難しい方などぜひご相談ください。

日にち: 毎月第2水曜日

時間: 10:30～14:30の間で3人まで(事前要予約制)

場所: 医療連携福祉相談室 費用: 無料

申込み: 前日の15:00までに医療連携福祉相談室で直接申し込むか、お電話でお申し込みください。

がん患者サロン 乳がん患者サロン 開催について

がん患者サロン

毎月第3木曜日
14:00～16:00
参加費 無料
事前申し込みは不要です。

乳がん患者サロン

毎月第3木曜日
14:00～16:00
参加費 無料
事前申し込みは不要です。

※今後の開催予定につきまして、詳細はお問い合わせください。

病理診断とは？

当院で2021年に、悪性腫瘍すなわち“がん”と病理診断した件数は実に3,000件を超えています。健康な時には、他人の疾患に思えますが、がんは実に身近な病気です。現在でも最も有効な治療は手術ですが、手術の体への影響が大きい患者さん、すでに進行して切除できない、あるいは転移や再発を認める患者さんも多くおられます。近年、その様な場合でも、治療法が飛躍的に発展して、手術切除に遜色のない成績を示す治療法もあらわれてきました。

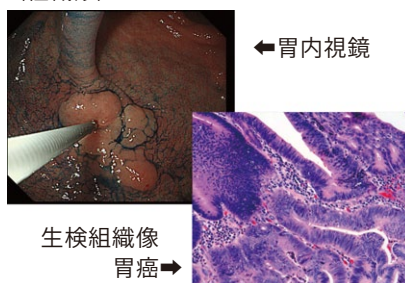
基本的な病理診断

がんの診断のみならず、様々な病気について病理診断が行われます。

1. 組織診断

もともと基本的手技です。体の一部を小さな塊（組織といいます）として採取し、特殊な操作を施して顕微鏡で観察できる様になります。病理医が観察して診断をします。

〈組織診〉



←胃内視鏡

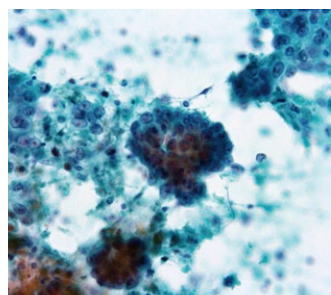
生検組織像
胃癌

2. 細胞診断

組織が採れない病変、あるいは体にたまる液体などを対象に、細胞だけを採取して観察します。簡便にしかも安全にできる診断方法ですが、組織診断に比べて、やや正確性を欠きます。

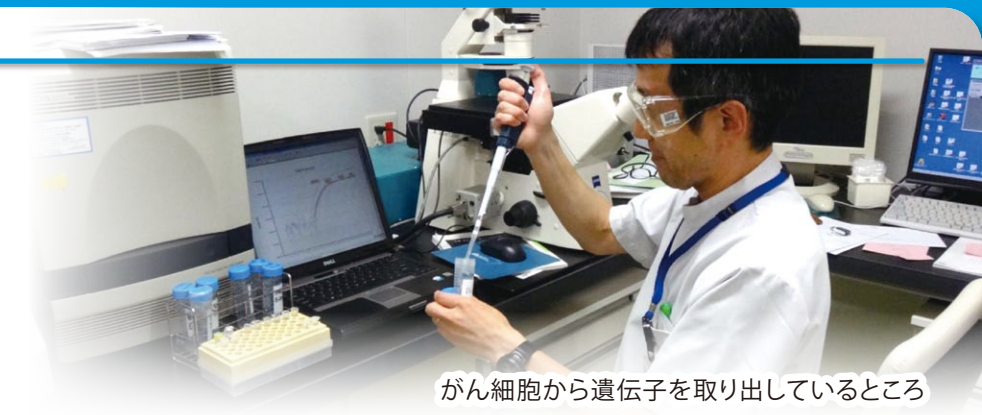
〈細胞診〉

気管支から採取された癌細胞



コンパニオン診断

近年は、さらにはがんの性状について、分子レベルあるいは遺伝子レベルの異常に由来する異常タンパクを検出し、その特徴をとらえた上で、薬剤選択を行います。これらをコンパニオン診断といいます。

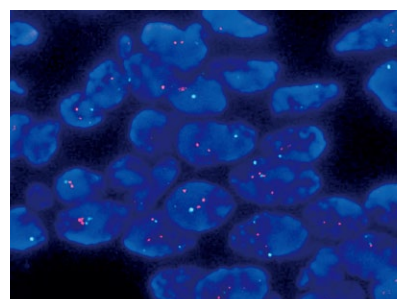


がん細胞から遺伝子を取り出しているところ

コンパニオン診断の種類

大腸癌や肺癌のEGFR（上皮成長因子受容体）、乳癌のHer2/neuなどが代表的ですが、RAS、BRAFなどの異常、免疫チェックポイントにかかわるPD-L1タンパク、マイクロサテライト不安定性などが日常的に検索され、がんの治療薬選択に寄与しています。

乳癌細胞でのHer2過剰発現

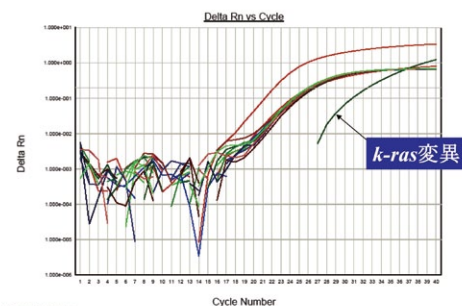


赤い点がHer2遺伝子

遺伝子オンコパネル検査

コンパニオン診断は治療効果が確認されている“異常と薬剤の組み合わせ”を確認する手技ですが、採取されたがん細胞から網羅的に遺伝子を検索して、異常を探る手法が開発されました。遺伝子オンコパネル検査と呼びます。当院は地域がん診療連携拠点病院に指定されており、的確に機能を果たしております。さらに遺伝子オンコパネル検査の結果をもとに行う医療を“ゲノム医療”と呼びます。これは国が指定したがんゲノム医療中核拠点病院やがんゲノム医療拠点病院と呼ばれる専門施設と連携したがんゲノム医療連携病院が行います。当院は連携病院としての資格取得に向けて準備中で、まもなく実現する予定です。

オンコパネル検査の結果には意義不明な情報が多く含まれ、ゲノム医療実施には、エキスパートパネルと呼ばれる拠点病院を含む専門的知識を持つ医師たちによる協議が必要です。その場で、期待できる治療薬について専門家同士が検討します。私たち臨床病理科は、オンコパネル検査で遺伝子異常を正しく検出できるよう、採取された組織や細胞を管理するとともに、エキスパートパネルに参加することになっています。



臨床病理科 鈴木 良夫

当院の治療や医療のご紹介

多面的な治療で、患者さんを支えます

手術療法について

手術療法とは、がんを切り取って治す治療法です。がんを完全に治すための治療法として、ほとんどの場合手術療法が選択されます。

手術はからだに負担のかかる治療法ですので、これをなるべく軽くするためにいろいろな手術が開発されています。胃カメラなどの内視鏡による手術では、皮膚にメスを入れることなくがんを切除できます。また、腹腔鏡や胸腔鏡による手術では、従来の開腹や開胸による手術に比べてずっと小さな傷でがんを切除することができます。

現代の手術療法は、チーム医療として行われます。たとえば、手術に加えて抗がん剤や放射線を併用する場合は、外科・内科・放射線科が一緒に治療にあたります。また、術前の準備段階から術後の回復期まで、外科医・麻酔医・看護師・薬剤師・理学療法士など多くの職種の人たちがチームとして診療に加わり、患者さんが安全に手術療法を受けられるような体制が作られています。

外科 永井

患者さん

緩和ケアセンター 齋藤

放射線治療について

治療の特徴

X線や放射性物質が出すビームを利用して、手の届かないところに治療ができるという特徴があります。各診療科、画像診断部門と協力して問題を見つけ、解決を目指しています。

- 外照射
 - 一般的な外照射（ほぼ全身が対象で乳房温存療法、食道癌、骨転移など）
 - 高精度治療 IMRT 強度変調放射線治療（前立腺癌など）、定位放射線治療（脳腫瘍、肺癌、肝臓癌など）
- 腔内照射（子宮癌）
- 内用療法 ソーフィゴ注（骨転移）、ゼヴァリン注（悪性リンパ腫）

放射線科（治療部門） 太田

化学療法センターでの治療について

「手術」「放射線治療」と並んで、がん治療の3本柱のひとつに「化学療法」があります。近年、新しい抗がん剤の開発や副作用を軽減する支持療法の進歩などにより、治療効果が向上し、標準化された化学療法が適用されるようになりました。このように有効な化学療法を多くの患者さんが受けるようになり、**生活の質（QOL）が重視されるようになったことから化学療法は外来治療が中心となり、安全で質の高い医療の提供の場として化学療法センターが設立され全科の治療がここに集約されています。**化学療法センターの病床数は40床（リクライニング8、ベッド32）あり、スタッフはがん化学療法看護認定看護師1名を含む看護師7名と医師1名が常駐しています。1人の患者さんを包括的に支えていく上での治療やサポートの質を高めるために医師、看護師、薬剤師、栄養士、歯科衛生士、リハビリ療法士によるチーム診療を行ない、すべての患者さんに満足していただけるよう心がけています。

化学療法科 中村